

## 初代「マツダ ロードスター」が「2019 日本自動車殿堂 歴史遺産車」に選定！

マツダの小型オープンスポーツカー「マツダ ロードスター(初代)\*1」が「日本自動車殿堂 歴史遺産車」に選定され、2019年11月15日(金)に学士会館(東京都千代田区)にて表彰式が行われました。

\*1 正式名称「ユーノス ロードスター」



初代 マツダ ロードスター(1989年)

マツダ車が「日本自動車殿堂 歴史遺産車」に選定されたのは、2003年のコスモスポーツに続いて、今回が2回目となります。

「日本自動車殿堂 歴史遺産車」とは、日本の自動車の歴史に優れた足跡を残した名車を選定し、日本自動車殿堂に登録し、永く伝承するものです。

このたびの選定にあたり、「4代にわたる変わらぬコンセプト」、「累計生産台数100万台を超え、世界記録を更新し続けている」、「魅力的なスタイリング、クルマを操る楽しさを提供し、日本の技術水準の高さを世界に知らしめた」ことが評価されました。

ロードスターは、1989年の発売以来、30年にわたり、人馬一体の走りがもたらす、ライトウェイトスポーツカー特有の”Fun(楽しさ)”を一貫して提供し続けています。

国や文化、世代を超えた多くのお客さまからご支持をいただき、これまでの累計生産台数は100万台を超えています。

日本だけでなく、「2人乗り小型オープンスポーツカー」生産累計世界一のギネス世界記録\*2をはじめ、世界の国々でも200を超える賞を受賞しています。

2015年に発表した4代目ロードスターは、「2015-2016日本カー・オブ・ザ・イヤー」、2016年「ワールド・カー・オブ・ザ・イヤー」「ワールド・カー・デザイン・オブ・ザ・イヤー」をダブル受賞するなど、高い評価をいただいています。

\*2 Guinness World Records Limited による認定

式典には元主査で、現在はロードスター アンバサダーを務める山本 修弘(やまもと のぶひろ)が出席。スピーチでは、その登場から30年を経て、今やロードスターがマツダだけのものではなく、世界中のお客様のものになっていると感じていること。

そして、初代ロードスターのカタログの冒頭に書かれたひとこと「だれもが、しあわせになる。」を引用し、お客様とマツダ自身がともにしあわせに、笑顔になれるように今後もロードスターを造り続けていく想いをお伝えしました。

## マツダ、東京モーターショーにて 初の量産EV「MAZDA MX-30」を世界初公開

マツダ株式会社(以下、マツダ)は、「第46回東京モーターショー」(主催:一般社団法人 日本自動車工業会)<sup>1</sup>において、マツダ初の量産EV「MAZDA MX-30(エムエックス サーティー)」を世界初公開しました。

MX-30は、新たにマツダのカーラインアップに加わる新世代商品の第3弾です。このモデルは、お客さまがクルマとのつながりを深め、クルマとともに自然体で自分らしい時間を過ごしていただくことを目指し、新たなクルマの使い方、創造的な時間と空間を提案します。



MX-30のデザインは、マツダのデザインテーマ「魂動(こどう)-SOUL of MOTION」のもと、「Car as Art」として、さらに芸術性を高めるとともに、表現に広がりを持たせることに挑戦しています。人の手が生み出す美しい造形とこだわりの作り込みを基礎としながら、将来に向けた価値観の変化や、新しいライフスタイルに寄り添うことを目指し、「Human Modern(ヒューマン モダン)」をコンセプトに、そのデザインをつくり上げました。

また、センターコンソール周りは、抜け感を持たせた形状とすることで、開放感のある空間を構成。コルクや再生材からできた生地などの環境に配慮した素材を、そのものが持つ自然な魅力を引き出して使用し、心地のよい室内空間を実現しています。加えて、お客さまが自由な発想で、クルマの多彩な楽しみ方を創造していただけるよう、フリースタイルドア<sup>2</sup>を採用しました。



さらに、人間中心の開発思想に基づき、EVでも変わることのない「人馬一体による走る喜び」を追求。新たに電動化技術「e-SKYACTIV(イー・スカイアクティブ)」を採用し、意のままの操作感と滑らかな車両挙動を高次元に融合させ、ドライバーが自然に運転を楽しむことができる走りを実現しました。

代表取締役社長兼 CEO の丸本 明(まるもと あきら)は、「マツダは、いつの時代もクルマを通じて、人生に輝きを感じていただきたいと思います。お客さまに愛着を持って、いつまでも保有したいと思っただけの独創的な商品・技術の創造に挑戦し続けてまいります」と述べました。